

『“実践的” 抗菌薬の選び方・使い方』

細川 直登(編)

[評者] 感染症コンサルタント 青木 眞

● 初学者から、「もう感染症の本は十分」
と思われるベテランにもお勧め

現在、世界のカルバペネムの7割を消費するわが国に戻ったのは20年ほど前。当時、評者は「西欧かぶれ」の感染症医と呼ばれるにふさわしく、参加する学会、購読するジャーナル、棚に並ぶ成書、全てが「洋物」であった。理由はわが国でメトロニダゾールがアメーバ赤痢や嫌気性菌に使えるようになったのが2012年、わずか2年前(本書p197)という極めてユニークな風景と無関係ではなかったと思う。しかしこの20年で臨床感染症を取り巻く風景は一変した。わが国にも抗菌薬の適正使用を熱く語れる真の臨床感染症の訓練を受けた医師が次々と生まれたからである。グローバルスタンダードを意識した本書は、そのような評者と価値を共有する仲間によってのみ執筆された。評者は各章を読み始めるとき、ついつい章末の執筆者の名前を見ては得心するのだった。

しかし、本書の特徴を「グローバルスタンダードに基づいた抗菌薬の本」と定義するだけでは不十分となる。なぜなら本書は今までにない新しい切り口で書かれているからである。具体的には添付文書が同じ菌、同じ疾患に適応を示す抗菌薬同士の比較が記載されている。一見似たような抗菌薬を、より精密に使い分けるのが目的である。序文で編者いわく「抗菌薬の選択には理由が必要である」。広域抗菌薬

を手にした社会が、思考停止にならないための警鐘から始まっている。

今日、わが国の感染症専門医は米国の感染症専門医よりも、より精密に抗菌薬の適応を考えていると思う。「市中感染ならばレボフロキサシン」といった雑な整理ではなく、グラム染色で起炎菌を想定して可能な限り狭域の抗菌薬の使用を心掛ける日本の感染症専門医。ある意味、日本人で米国感染症専門医第一号になった喜舎場朝和先生の非常に繊細な世界である。彼らは闇雲にグローバルスタンダードを錦の御旗とする「西洋かぶれ」ではなく、日本の状況に合わせて創意工夫する、より緻密で創造的な感染症専門医といってもよい。

感染症専門医とはペニシリンGとカルバペネムの強さが同じであることを知る人々である。抗菌薬の枯渇が声高に叫ばれる今日、抗菌薬をより丁寧に大切に使用する文化は、この新しい日本の感染症専門医からしか生まれない。「抗菌薬は使用すればするほどその価値が下がるという点では他の薬剤と一線を画している(本書p24)」これこそが編者、細川直登先生がよって立つ、本書の原点である。

初学者から、「もう感染症の本は十分」と思われるベテランにもお勧めします。

● A5 / 頁236 / 2014年 / 本体3,300円 + 税

[ISBN978-4-260-01962-0] 医学書院刊